

小学生の社会的スキルと一緒に遊ぶ人数の関係についての検討

重吉直美・森田愛子・湯澤正通・大塚泰正

Social skills and the number of playmates among elementary school students

Naomi Shigeyoshi Aiko Morita Masamichi Yuzawa Yasumasa Otsuka

The relationship between social skills and the number of playmates among elementary school students was investigated. Elementary school students ($n = 147$) were asked about their social skills and the number of their playmates, as well as about the contents of their play. Social skills were classified into three categories: "empathic and supportive skills," "active and assertive skills," and "teasing and obstructive skills." Structural equation modeling was performed with the three categories of social skills as independent variables and the number of playmates as the dependent variable.

Results indicated that empathic and supportive skills, as well as teasing and obstructive skills had a positive relationship, whereas active and assertive skills had a negative relationship with the number of playmates. We conclude that empathic and supportive skills are useful for increasing the number of playmates among elementary school students.

Keywords : Play, Social Skills, Number of playmates, Elementary school.

問題と目的

近年、社会の変化にともない、子どもの遊びが変わってきたといわれている。鶴山 (2008) が小学生を対象に行った調査によると、現在行っている遊びとして、「ゲーム」をあげた小学生が 40.6% と最も多く、放課後の過ごし方では、「ゲーム、パソコン」、「習い事」、「テレビ、DVDをみる」が 74.4% と多くを占めていた。また、一緒に遊ぶ友達の数は、1~3 人が半数以上を占めるという結果であった。一緒に遊ぶ対象は同学年が圧倒的に多く、他学年と遊ぶ子どもは 11.8% にとどまっていた。このように、現代の遊びは、一緒に遊ぶ友達の数が少ない、屋内・孤立型遊びを行っているという特徴をもっている。

子どもの遊びが変化した理由として、少子化や地域の結びつきの希薄さ、遊ぶ場所や時間の減少、インターネットやコンピューターゲームなどの普及などが考えられる。子どもが少なくなっている

*広島大学大学院教育学研究科(Graduate School of Education, Hiroshima University)

ことから、たとえばきょうだいと遊ぶ機会は以前よりも減っており、学年を超えた仲間集団は形成されにくい。地域の結びつきが希薄になると、一緒に遊ぶ仲間を見つけにくい。また、特に都会では、子どもが安全に遊べる場所は少ないと考えられる。さらに、現代の子どもたちは塾や習い事などで忙しく、外で遊ぶような時間が少ない。コンピューターゲームは、友達と一緒にいるだけでも、お互いに会話やかかわりあいを持たないという状況を生み出すことも少なくない。このような遊びの変化を小林 (2000) は、「情緒を交換する遊びから、情報を交換する遊びへと変化していった」と指摘している。このような遊びの変化は、児童期における社会性の発達、つまり対人関係の形成や維持に否定的な影響を及ぼすと考えられる。

文部科学省 (2008) によると、平成19年度に不登校の子どもは小・中学校で12万人を超え、中学校では全生徒に占める割合が過去最高であった。不登校の主な理由として、不安などの情緒混乱、無気力が挙げられているが、他の児童・生徒との関係も10%以上の割合を占めている。さらに不登校が増えた要因を都道府県教育委員会に複数回答で尋ねたところ、93%の都道府県教育委員会から「人間関係をうまく構築できない児童・生徒が増えている」という要因が挙げられた。これらのことから、現代の学校における不登校の一因は、子どもの対人関係にあると考えられる。

このような現状において、対人関係をスムーズに行うために社会的スキルを発達させることは非常に重要である。児童期における遊びと社会的スキルとの関係については多くの研究がなされている。たとえば須藤 (1991) は、児童期の「競争遊び」を取り上げ、ルールを守りつつ人との交わりを築くという点で、「競争遊び」が子どもの社会的スキルの発達に重要であると指摘している。また、鈴木・庄司 (1990) は、学校や家での遊び場面の中で、どのような状況下で社会的スキルが子どもに要求されるかを調査・検証し、多くの遊び場面で社会的スキルが使用されていることを明らかにしている。大島・本田・北原・津久井・中山・根本・小林 (2002) は、小学校4年生から6年生の児童を対象に、友だちと遊ぶ頻度によって社会的スキルの高さが異なっているかを検討した。その結果、男女ともに、友達と遊ぶ頻度が高いと、積極的・主張的かかわりのスキルが高いことが示された。

これらの研究から、遊びは社会的スキルを学習する機会を多く含んでいると考えられる。しかし、一緒に遊ぶ人数と社会的スキルとの関連については、明らかにされていない。同じ遊びであっても、一人で遊ぶ場合と、複数でかかわりあいながら遊ぶ場合とでは使用する社会的スキルやその頻度が異なると考えられる。Rubin (1986) は、構成的な遊びや劇的な遊びを他の子どもと一緒にできることは社会的に発達していることの指標になるが、一人で単純な動作を繰り返すだけの機能的遊びが多いことは社会的に未発達であることの指標になると指摘している。さらに、山本 (2000) は、児童期の特徴の一つに教師などの成人や同年輩などとの様々な人々との出会いを挙げ、特に同年輩の仲間との出会いによって、彼らと自分を積極的に比較する機会が得られ、そこでの発見が児童のパーソナリティ発達に好ましい影響を及ぼす可能性があることを指摘している。これらのことから、より多くの仲間と関わる、つまりより多くの仲間と創造的な活動やルールのある遊びを行うことで、自分との違いあるいは他者の個性を認識する機会が増えることに繋がると考えられる。このような対人関係の中で、他者を受け入れたり、上手にコミュニケーションをもつための社会的スキルの獲

得・向上を促すことができると推測される。

そこで本研究では、一緒に遊ぶ人数と社会的スキルとの関連を検討することを目的とする。社会的スキルにはさまざまな要素が含まれるため、本研究では社会的スキルをいくつかの下位因子に分類したうえで、一緒に遊ぶ人数との関連を明らかにする。なお、本研究では社会的スキルを次のようなスキルと定義する。①学習される、②対人関係の中で展開される、③他者との相互作用の中で個人の目標達成に有効である、④社会的に受容されるものであると捉えることができるものである(庄司, 1991)。

方法

調査参加者 参加者は〇県のK小学校の2年生48名(男子29名, 女子19名), 4年生48名(男子27名, 女子21名), 6年生51名(男子27名, 女子24名)の児童, 合計147名であった。このうち, 社会的スキル尺度に記入漏れのあった8名(2年生男子3名, 4年生女子2名, 6年生男子2名, 女子1名)を除いた139名を分析対象者とした。

手続き 2008年10月に, 各クラスの担任教師を通して, 質問紙による一斉調査を行った。

質問紙の構成 質問紙は, 質問1(遊びの実態調査)と質問2(社会的スキルの測定)の2つから構成された。

質問1の遊びの実態調査では「あなたは, 学校の休み時間に何をして遊ぶことが多いですか」という質問に対して, 1番よくする遊びを自由記述で書いてもらった。さらに, それぞれの遊びについて, 一緒に遊ぶ人数を尋ねた。一緒に遊ぶ人数については, “1人”, “2~3人”, “4~5人”, “6人以上”の中から当てはまるものに○をつけてもらった。人数の得点化にあたっては, “1人”という回答には1点, “2~3人”には2.5点, “4~5人”には4.5点, “6人以上”には6点を与えた。

質問2の社会的スキルの測定には, 庄司(1991)の児童・生徒用社会的スキル尺度を改変して用いた(以下, 社会的スキル尺度)。この尺度は, ①共感・援助的にかかわりのスキル(項目例: 友だちが一人で寂しそうときは声をかける), ②積極的・主張的にかかわりのスキル(項目例: 友だちに会ったとき, 自分から声をかける), ③相手の自尊心を低めるからかい・妨害的スキル(項目例: 友だちが失敗すると, つい笑ってしまう), ④相手を考慮しない拒否・無視的にかかわりのスキル(項目例: 友だちとの約束を守らない)の4因子36項目から構成される。これらの項目の中から, 4つの因子の項目数が偏らないこと, 小学校2年生でも回答可能であることを考慮し, 26項目を選定して用いた。回答方法は, 1. 「ぜんぜんしていない」, 2. 「あまりしていない」, 3. 「ときどきしている」, 4. 「いつもしている」の4件法であった。

質問紙全体を通し, 2年生用質問紙では, 4・6年生用質問紙の中にある学習済みでない漢字をひらがなに変換した。

結果

社会的スキル尺度の質問項目の検討

26項目からなる社会的スキル尺度を, 庄司(1991)により分類された「共感・援助的にかかわり」,

「積極的・主張的かかわり」、「からかい・妨害的かかわり」、「拒否・無視的かかわり」の4因子に分類した。「積極的・主張的かかわり」において、「友だちと話しているとき冗談などを言って盛り上げる」という質問項目を含めると $\alpha=.62$ と低くなるため、この項目を削除した。また、「からかい・妨害的かかわり」において、「友だちの前で、自分の得意なことを自慢する」という質問項目を含めると $\alpha=.60$ と低くなるため、この項目を削除した。また、「拒否・無視的かかわり」については、 $\alpha=.40$ であり、どの項目を削除しても $\alpha=.50$ 以上にならなかったため、この因子を削除した。最終的に分析に使用した項目を因子ごとに分類した結果をTable 1に示した。

Table 1
本研究で使用した社会的スキル尺度の下位因子、質問項目、 α 信頼性係数

質問項目
共感・援助的かかわり($\alpha=.76$)
2 友だちが一人で寂しそうなときは声をかける
4 友だちが何かを上手くしたとき、「じょうずだね」などとほめる
13 友だちに「ありがとう」と言って感謝する
15 友だちの話を「うんうん」といってよく聞く
16 話したいことがあっても、友達の話を終りまで聞いてから話す
19 自分にも悪いところがあると思ったら「ごめんね」などとあやまる
20 こんなことを言ったら、相手に悪いと思うことは言わないようにする
24 友だちに何かをしてもらったら、お返しに何かをしてあげる
積極的・主張的かかわり($\alpha=.70$)
10 友だちに会ったとき、自分から声をかける
14 自分から、友だちを遊びに誘う
17 友だちと話したいとき、自分から声をかける
18 初めて会った人にも気楽に話しかける
21 友だちが良くないことをしていたら注意する
22 相手と意見がくいちがっていても、自分の意見を言う
23 困っているときは、友達に手伝って欲しいとお願いする
からかい・妨害的かかわり($\alpha=.67$)
1 友だちが失敗すると、つい笑ってしまう
5 友だちが本を読んでいるとき、おもしろいことがあれば、ついさわいで友だちの邪魔をしてしまう
7 他の友だちが居るところで、仲の良い友だちと、内緒話をする
12 友だちを馬鹿にする

社会的スキルと一緒に遊ぶ人数との関係

社会的スキルと一緒に遊ぶ人数との関係を検討するため、一緒に遊ぶ人数を基準変数、「共感・援助的かかわり」、「積極的・主張的かかわり」、「からかい・妨害的かかわり」を説明変数とする共分散構造分析を行った。社会的スキルの下位因子間には関連があることが想定されるが、因果の方向性については両方向が考えられるので、双方向の因果関係を仮定した。さらに、社会的スキルの下位因子と一緒に遊ぶ人数との関連を検討するため、それぞれの下位因子と一緒に遊ぶ人数に影響を与えるという因果関係を想定した。このような因果関係を想定することで、どのような社会的スキルを高めれば、より多くの友人と遊ぶことができるかに関する示唆を得ることができると考えられる。

共分散構造分析の結果をFigure 1に示した。社会的スキル下位因子間の関係については、「共感・援助的かかわり」と「積極的・主張的かかわり」において、強い正の相関($r=.91$)が認められた。

さらに、「共感・援助的かかわり」と「からかい・妨害的かかわり」においては中程度の負の相関 ($\gamma = -.68$) が認められた。「積極的・主張的かかわり」と「からかい・妨害的かかわり」においては中程度の負の相関 ($\gamma = -.43$) が認められた。また、社会的スキルと一緒に遊ぶ人数との関連については、「共感・援助的かかわり」、「からかい・妨害的かかわり」と一緒に遊ぶ人数との間に正の関連が認められた (それぞれ $\beta = .36, .42$)。また、「積極的・主張的かかわり」と一緒に遊ぶ人数の間には負の関連が認められた ($\beta = -.35$)。

適合度指標の値は、GFI=.837,AGFI=.793,RMSEA=.066 であり、データとモデルとの適合度は比較的良いといえる。

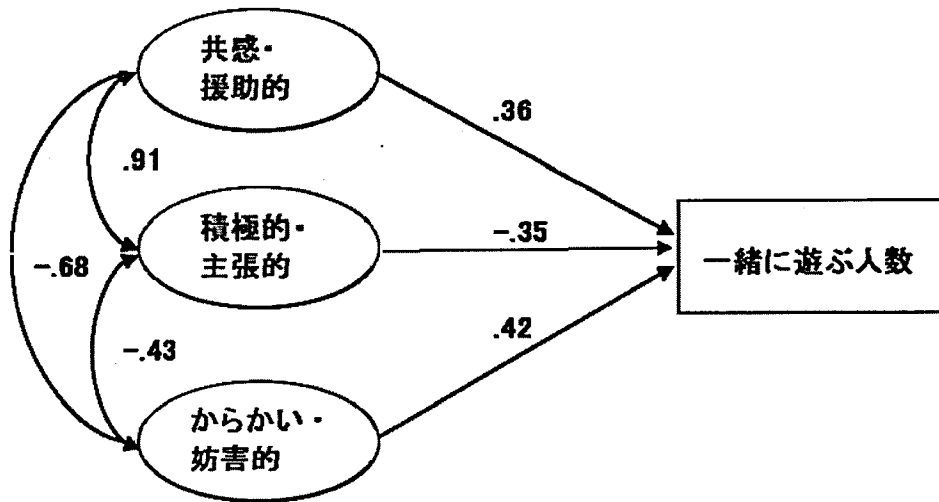


Figure 1 「共感・援助的かかわり」「積極的・主張的かかわり」「からかい・妨害的かかわり」を説明変数、一緒に遊ぶ人数を基準変数とする共分散構造分析の結果
注) 観測変数と誤差変数は煩雑さを避けるため表示を割愛した。

考察

本研究の結果から、「共感・援助的かかわり」因子と「積極的・主張的かかわり」因子との間には強い正の相関、「共感・援助的かかわり」因子と「からかい・妨害的かかわり」因子との間には中程度の負の相関が認められた。社会的スキルの各因子から一緒に遊ぶ人数への影響に関しては、「共感・援助的かかわり」と「からかい・妨害的かかわり」因子において正の関連が、「積極的・主張的かかわり」因子において負の関連が認められた。

「共感・援助的かかわり」は、「こんなことを言ったら、相手に悪いと思うことは言わないようにする」、「友達が一人で寂しそうなときは声をかける」など、自分のことだけでなく、他者の立場に立って、他者を思いやる視点が必要となる。さらに、「共感・援助的かかわり」を行うことで、一緒に遊んでいるときに、仲間が感じている楽しさ、喜び、時には不満や怒りに共感し、感情を共有で

き、ともに遊んでいるという一体感をもたらすことができると考えられる。このような社会的スキルは、多くの仲間から受け入れられて評価されるものであると推測される。この社会的スキルを使用することで多くの仲間から慕われ、一緒に遊んでいて楽しいと心地よく感じられることで、積極的に遊びに誘われることも多くなることが推察される。このように他者とかかわりあいながら遊ぶことができる、あるいは多くの仲間と遊んだり、話したりすることで、他人を気遣うかかわりである「共感・援助的かかわり」が生まれ、そのようなかかわりによって一緒に遊ぶ人数が増加し、さらに「共感・援助的かかわり」が向上するという循環を形成することができると考えられる。

一方、「積極的・主張的かかわり」と一緒に遊ぶ人数との間には、正の関連が認められなかった。「積極的・主張的かかわり」には、自分から声をかけたり、遊びに誘うという一面が含まれるため、一緒に遊ぶ人数との間には、本来正の関連が想定される。しかしながら、「積極的・主張的かかわり」が乏しい児童は、他の児童から遊びに誘われることが多いと推測される。そのため、「積極的・主張的かかわり」スキルと遊ぶ人数との間には、正の関連が認められなかった可能性が考えられる。

他方、「積極的・主張的かかわり」と「共感・援助的かかわり」との間には強い正の相関が認められた。このことから、「積極的・主張的かかわり」は一緒に遊ぶ人数に間接的に正の影響を与えていると考えることもできる。「積極的・主張的かかわり」は、他者と肯定的にかかわり、円滑な付き合いをするために必要なスキルであるという点で、「共感・援助的かかわり」と共通しているといえる。

「積極的・主張的かかわり」と同時に、皆の意見を取り入れ、共感するという「共感・援助的かかわり」を使用することができれば、一緒に遊ぶ人数を増やすことができる可能性があるといえる。

「からかい・妨害的かかわり」と一緒に遊ぶ人数との間には、正の関連が認められた。庄司 (1994) によると、「からかい・妨害的かかわり」は男子に多く見られるスキルであり、このようなスキルを状況や相手を考慮しながらうまく使用できる子どもが仲間に評価され、社会的地位も高いことがうかがえるという。一見、「からかい・妨害的かかわり」は、仲間とのかかわりを妨害する行動に思われるが、仲間との関係性の中で、お互いの了承を得た上で使用される場合には、仲間とのかかわりをスムーズにする効果もあると考えられる。本研究では「からかい・妨害的かかわり」を発揮する状況や相手については考慮しなかったため、明言することはできないものの、「からかい・妨害的かかわり」を状況や相手に合わせてうまく行うことで、多くの仲間から評価を得て、一緒に遊ぶ人数増える可能性も考えられる。

しかしながら、「からかい・妨害的かかわり」と「共感・援助的かかわり」との間には負の相関があるため、「からかい・妨害的かかわり」が増えると「共感・援助的かかわり」が減少する可能性が考えられる。「共感・援助的かかわり」が減少した結果、間接的に一緒に遊ぶ人数を減少させる可能性が考えられる。「からかい・妨害的かかわり」は、状況や相手を考慮しながらうまく使用すれば、仲間から評価を得られるものの、「友だちを馬鹿にする」や「友だちが失敗するとつい笑ってしまう」など、場合によっては他者をとのかかわりを妨害し、相手の気分を損なう危険性もある。小学生が「からかい・妨害的かかわり」を使用する場合には、「共感・援助的かかわり」の減少により一緒に遊ぶ人数が減少しないように注意する必要があると言える。

引用文献

- 小林正幸 (2000). カウンセリングに学ぶ友達づくりー役に立つ知識と技術ー ソーシャルスキルをどうやって身につけるか 児童心理, **54**, 63-68.
- 文部科学省 (2008). 平成 19 年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査 (小中学校について) 文部科学省 2008 年 8 月 1 日
<http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/20/08/08073006.htm> (2009 年 1 月 17 日)
- 大畠みどり・本田千尋・北原麻理子・津久井敦子・中山純子・根本喜代江・小林正幸 (2002). 児童期における遊びと社会的スキルの関連ー遊びの種類と頻度の視点からー 東京学芸大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, **26**, 111-126.
- Rubin,K.H. (1986). Play,peer interaction,and social development.In A.W. Gottfried &C.C.Brown,(Eds.), *Playinteractions:The contribution of play materials and parental involvement to children's development*. Lexington:Lexington Books. pp. 163-174.
- 須藤敏明 (1991). 現代っ子の遊びと生活 “遊び” からみた子育て論 青木書店
- 鈴木聡志・庄司一子 (1990). 子どもの社会的スキルの内容について 教育相談研究, **28**, 24-32.
- 庄司一子 (1991). 社会的スキルの尺度の検討ー信頼性・妥当性についてー 教育相談研究, **29**, 18-25.
- 庄司一子 (1994). 子どもの社会的スキル 菊池章夫・堀毛一也 (編著) 社会的スキルの心理学 100 のリストとその理論 川島書店 pp. 201-218.
- 鶴山博之 (2008). 子どもの遊びの実態に関する研究 富山国際大学国際教養学部紀要, **4**, 133-137.
- 山本正美 (2000). パーソナリティ発達上の問題に対する支援 堀野 緑・濱口佳和・宮下一博 (編著) 子どものパーソナリティと社会性の発達 北大路書房 pp. 116-124.